

建築の「オブジェクト」をめぐって

1960年代から現在までのアメリカ建築の潮流を辿る

平野 利樹

東京大学 隈研究室 博士課程、Toshiki Hirano Design

Web : <http://toshiki-hirano.com> Mail : info@toshiki-hirano.com

00. イントロ

a. なぜこのトピックなのか？

- ・最近5年間でアメリカの建築の状況が大きく変わりつつある
- ・一方、日本ではまだ紹介されていない

b. なぜ「オブジェクト」なのか？

- ・アメリカで新しい流れを生み出しつつある若手建築家の活動は一見すると互いに無関係であり、これまでの建築の潮流からも無関係である
- ・これを読み解くうえで、「オブジェクト」という言葉がキーワードになる
- ・「オブジェクト」という言葉に注目すると、現在のアメリカ建築の状況が、どのように過去の流れを受け継いで発展しているかも見えてくる
- ・ここでは、1960年代以降のアメリカの建築の流れを「オブジェクト批判の萌芽」「オブジェクト批判の発展・完遂」「オブジェクト批判以後」「オブジェクトへの回帰」という大きく4つの時代に分けて考察

01. オブジェクト批判の萌芽

a. コーリン・ロウ (Colin Rowe)

a-01. 『理想的ヴィラの数学』(1947)

- ・パツァーディオのヴィラとコルビュジエの住宅の平面を分析し、それらの類似性を指摘
- ・それぞれの建築における様々な要素を抽象化し、要素同士の関係性を示すダイアグラムに還元
- ・建築の物質的な存在よりも、要素同士の関係性こそが本質的であるという考え
- ・後述のアイゼンマンのカードボード・アーキテクチャへ影響

a-02. 『コラージュ・シティ』(1971)

- ・第3章「オブジェクトの危機」でモダニズムを「オブジェクト」として批判（コルビュジエの《ユニテダビタシオン》など）
- ・オブジェクト＝内部の機能から導き出され、単一の秩序を持ち内部で完結したもの
- ・オブジェクト＝都市コンテキストからの自律（都市の「図と地」分析から）
- ・オブジェクト性を弱め、都市コンテキストに溶けさせる手法として「コラージュ」を導入

a-03. コンテクスチュアリズム

- ・『コラージュ・シティ』での思想は、コンテクスチュアリズム思想として成立（当時ロウが指導していたコーネル大学アーバンデザインスタジオを中心として）
- ・のちに物理的コンテクチュアリズムと文化的コンテクスチュアリズムに分かれる
- ・物理的コンテクチュアリズムは建築をヴォリュームとして捉え、周辺の都市空間との連続的な関係性を考慮する姿勢
- ・物理的コンテクチュアリズムにおいて「コラージュ」は都市的な視点で見た際の建築形態の周辺との適合性を生み出すための幾何学的形態操作
- ・文化的コンテクチュアリズムは周辺の建築物の様式や、その文化が嗜好する象徴との関係性を考慮する姿勢
- ・文化的コンテクチュアリズムにおいて「コラージュ」は歴史的建築様式の要素や大衆文化において慣れ親しんだ看板や商品などを記号として扱い、それらを組み合わせる手法（のちにポスト・モダニズムに結実する）

b. ピーター・アイゼンマン (Peter Eisenman)

b-01. 『オブジェクトから関係性へ』 (1971)

- ・ 建築は表層構造 (オブジェクト) と深層構造という二つの構造によって成立していると分析
- ・ 表層構造 (オブジェクト) = 物質性。色、質感、形 (form ではなく shape)
- ・ 深層構造 = 要素同士の関係性 (ロウのヴィラ分析と同様)

b-02. カードボード・アーキテクチャ

- ・ ロウのヴィラ分析の手法を建築の生成の手法として応用
- ・ 深層構造から導出される建築のあり方
- ・ 物質性 (オブジェクト) を極限まで排除することを追求 (カードボード)
- ・ オブジェクトではなく、深層構造こそが建築の本質であるという思想

b-03. デコンストラクティビズム

建築家はいつも純粋な形態、そしてすべての不安定性や無秩序を排したオブジェクトを作ることを夢見てきた

(Johnson, Philip, Wigley, Mark (1988) Deconstructivist Architecture, Museum of Modern Art, p.10. (筆者翻訳))

- ・ フィリップ・ジョンソン (Philip Johnson) とマーク・ウィグリー (Mark Wigley) による MoMA での企画展「デコンストラクティヴィスト・アーキテクチャ」展 (1988) に端を発したスタイル
- ・ オブジェクトの形態的安定性を批判、オブジェクトの不安定化を主張 (ウィグリー)
- ・ 1980年代に入り、アイゼンマンも深層構造の追求から、オブジェクトの不安定化に関心を移行 (《ウェクスナー視覚芸術センター》(1983-1989))

b-04. 《シンシナティ大学アーノフ・アート・センター》 (1988-1996)

- ・ 必要なプログラムを収容した直方体のヴォリュームを複数のキューブに分節し、敷地の丘の起伏や既存建物の山形の平面形に沿って曲線を描く形に変形
- ・ キューブ同士のズレや衝突にアイゼンマンは関心 (デコン的関心)
- ・ グレッグ・リンが当時所員としてプロジェクトに関わる
- ・ リンは、分節された直方体のそれぞれが微小な角度や位置の差異をもちながら全体の曲線構造を生み出していることに着目し、連続性の中に多様性が包容されていると指摘

b-05. 《レブストック・マスタープラン》 (1990)

今日、メディア化された環境は、古典的な時間性、つまり経験の時間という概念を揺り動かしている。世界中のどの午後の時間帯であっても、たとえばマドリードのプラド美術館であれニューヨークのメトロポリタン美術館であれ、人々は、美術作品を立ち止まって見ようともせず、その前を通りすぎる。良くて自分たちの経験を写真に写すくらいだ。彼らにはオリジナルを目の当たりにする時間はなく、それを経験する時間はさらさない。メディアのために、経験の時間という概念は変わってしまった。

(Eisenman, Peter "Unfolding Events: Frankfurt Rebstock and the Possibility of a New Urbanism" Eisenman, Peter (1993) Re: Working Eisenman, Academy Press, p.59. (筆者翻訳))

折りたたむ (フォールディング) という概念において、既存のカルテジアン座標系 (デカルト座標系) の秩序は崩れ、形態は連続的なものとして捉えられる。それと同時に、垂直と水平、図と地の新しい関係性の可能性が示される。

(前掲論文、p.60. (筆者翻訳))

- ・ 永続的な時間のあり方が成立しない現代社会において、静的ではなく動的な建築のあり方を追求 (建築への時間概念の導入)
- ・ ロウやコンテクスチュアリズムの「図/地」概念を静的なものとして批判
- ・ 「図/地」の関係性を動的にし、時間性を建築に導入する手法として「フォールディング」が導入される (アイゼンマンはドゥルーズの『襞』、ルネ・トムのカタストロフィー理論を参照)
- ・ 敷地全体を覆う平面グリッドを設定し、グリッドの各点を敷地の形状に合わせるように平面上および高さ方向に変位させることで、平面を折りたたむ

02. オブジェクト批判の発展・完遂

a. ペーパーレス・スタジオ

建築教育の中で、デザイン・スタジオはその核にあたるものである。1994年秋、GSAPはペーパーレス・スタジオの設立によって新たな歴史を作ることとなった。これは、学生の作業拠点は間仕切りに囲まれた製図板であるという、一般的な概念を根本的に覆すものである。ペーパーレス・スタジオでは、合計33人の学生一人ひとりに、専用のワークステーション（Silicon Graphics社のIndyまたは、Apple ComputerのPower Macintosh）が与えられる。ワークステーションには高性能のソフトウェアがインストールされ、またネットワーク性能もあり、リサーチや執筆、デザインや分析、そしてプレゼンテーションなどの、さまざまな学術的な作業に対応している。

われわれの知る限り、コロンビアは、建築学部として初めて、SGIや、Softimageのような最先端のビジュアルライゼーションソフトを、建築学部の学生専用に提供した。ペーパーレス・スタジオはAvery Hallの7階のロフトスペースに設置されている。このスペースは、空調制御された中央コンピュータゾーンと、隣接する、伝統的なメディアを使った作業のための共同作業場として使われる「外部の」バルコニーの二つのスペースに分けられている。

(『ABSTRACT 95/96』p.64. (筆者翻訳))

- ・1994年にコロンビア大学建築学部で設立され、世界でもいち早くデジタル・テクノロジーを建築教育に導入した建築設計スタジオの総称
- ・グレッグ・リン、スタン・アレン、ハニ・ラシッド、ジェシー・ライザー + 梅本奈々子が中心的メンバー
- ・1990年代における、グローバリズムによってあらゆるものの境界が消失し、流動的に接続される世界像（ベルリンの壁崩壊やEUの発足…etc）と、ドゥルーズの哲学（生成変化、平滑空間、襞、リゾーム…etc）の「接続の思想」としての解釈からの影響
- ・「接続性」「関係性」の世界像
- ・ロウ、アイゼンマンから始まったオブジェクト批判を 発展、完遂

b. グレッグ・リン (Greg Lynn)

- ・複数のパラメータの関係性によって生成され、しなやかに変化する建築のあり方
- ・オブジェクトよりも生成するパラメータのネットワークが本質であるという考え方

b-01. 多様性を内包した建築の追求

建築の起源を埋め込んだり明らかにすることを続けるのではなく、普遍的なタイプを追求することなく、それぞれのもつ特性や差異を尊重する何か別の方法があるのではないだろうか。

(Lynn, Greg (1992) "Multiplicitous and Inorganic Bodies" Assemblage No.19, p.34. (筆者翻訳))

- ・普遍的で静的なモデルの追求であるとしてロウのヴィラ分析を批判
- ・普遍性ではなく、差異を尊重し多様性を内包する建築を追求
- ・生物学者のダーシー・トムソンからの影響

b-02. Architectural Design フォールディング特集号 (1993)

しなやかさによって、建築は柔軟性を通して複雑性に取り組むことができるようになる。差異の複雑な関係性を、固定的な観点から抑制するのではなく、かといって対立性の中に捕らえてしまうのでもなく、柔軟で予測不可能な、局所的な接続によって維持することが可能になるかもしれない。

(Lynn, Greg (1993) "Architecture Curvilinearity: The Folded, the Pliant, and the Supple" Architectural Design, 63 no.3/4, p.8. (筆者翻訳))

- ・デコンストラクティビズムとポストモダニズムは、異質な要素同士の複合や衝突によって建築における多様性を追求していると指摘
- ・異質の要素の組み合わせではなく、「しなやか」に変化する建築システムによって多様性を内包できると主張
- ・アイゼンマンが導入した「フォールディング」を形態操作の手法として定義

b-03. 《Stranded Sears Tower》 (1992)

このプロジェクトはシアーズ・タワーという、シカゴのスカイラインのアイコンであり、また世界で一番高い建築物であるアメリカのモニュメントのイメージを再編成する試みである。シアーズ・タワーのアイコンとしての地位は、コンテクストからの乖離によって成立している。タワーは、連続的で均質な都市文脈から分離し、統一されたオブジェクトとして成立している。

(Lynn, Greg (1992) "Multiplicitous and Inorganic Bodies" Assemblage No.19, p.42. (筆者翻訳))

- ・チューブが枝分かれしたり、より太いチューブへと結合をしながら、橋や他の建物などの障害物や地形からの外的な影響を受け、しなやかに変形しながら延伸するような構造体

- ・アイゼンマンの《アーノフ》で用いられた形態操作の手法を応用
- ・周囲のコンテキストとは無関係に自律的で自己完結した、オブジェクトとしての建築のあり方に対して、外部からの影響によって柔軟に、そして多様に形態が変化するような建築のあり方を提案

b-04. 《ポート・オーソリティ・ゲートウェイ》(1994)

- ・ペーパーレス・スタジオ開始直前にリングソフトウェアの練習として設計したプロジェクト
- ・初めてアニメーション機能を用いて設計
- ・敷地を含むエリア一帯を3Dでモデリングし、その中の歩行者や車、バスの流れを、エリアを流れる仮想の力として設定
- ・屋根の始点から複数のボールを投げ入れ、それらのボールが、重力や、設定した仮想の力によって様々な軌跡を描いて飛び跳ねる様子をアニメーション機能によって生成、その軌跡の形状をそのまま構造体とし、補強の部材や、膜を取り付けた
- ・人間や車の流れといった都市におけるさまざまなアクティビティなど、従来のコンテクスチュアリズムで扱うことが困難であった都市が持つ様々な状況やそのなかの要素を、設計プロセスに反映

b-05. 《発生学的住宅 (Embryological House)》(1999)

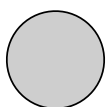
- ・形態は12個のコントロール・ポイントを持ったスプライン・カーブの断面をつなぎ合わせることで生成されており、コントロール・ポイントを移動させることで、ヴァリエーションをもった多種多様な形態が生まれる
- ・個々のオブジェクトをデザインするのではなく、それを生成する、複数のパラメータを内包したプロトタイプをデザインし、それらのパラメータを変えることによって、様々なヴァリエーションをもったオブジェクトを生み出す
- ・アイゼンマンの追求したオブジェクトと深層構造の関係性のあり方と類縁
- ・パラメトリックデザインとして、2000年代前半から建築デザインの手法として定着

c. スタン・アレン (Stan Allen)

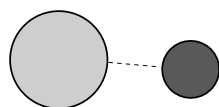
- ・都市というフィールドの中の粒子としての建築のあり方
- ・オブジェクトよりも流動する粒子の関係性が本質であるという考え方

c-01. 『オブジェクトからフィールドへ』(1997)

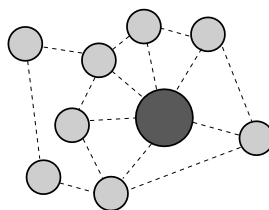
- ・フィールドの概念を提示
- ・ミニマリズム、ポスト・ミニマリズムのアートからの影響によって発展（ドナルド・ジャッド、ロバート・モリス、バリー・ルヴェーなど）
- ・ミニマリズム以前において、作品はオブジェクト単体として自律していたのが、ミニマリズムにおいて、初めて鑑賞者の存在が意識され、それらとオブジェクトの関係性によって作品が成立するという思考が生まれた（マイケル・フリードはこれを「客体性 (objecthood)」と定義）
- ・ポスト・ミニマリズムは、ミニマリズムにおけるそのようなオブジェクトを、さらに粒子的な素材の関係性へと解体
- ・作品制作の対象が、オブジェクトから、粒子的な素材が展開される場に移行
- ・ミニマリズムまでは、主体とオブジェクト（客体）という二者のみの関係性によって作品が成立
- ・ポスト・ミニマリズムにおいて作品は、オブジェクトが無数の粒子に解体されたことによって、主体と粒子による関係性のネットワークによるものとなった
- ・都市や建築を、無数の粒子の関係性のネットワークによって構成されているものとして提示（アレン）
- ・粒子は個別には重要な価値を持ち得ないが、集合し、関係性を持つことで、一つの流動的なネットワークシステムとしての特性が生まれる
- ・一つ一つの粒子の挙動、関係性のあり方を方向づけるものとしてフィールドが位置付けられる



オブジェクト単体としての
作品の成立



オブジェクトと主体の関係性への
関心の移行



粒子と主体によるネットワーク

c-02. フィールドと粒子

(建築の実践は) 自律的なオブジェクトを作るのではなく、プログラム、イベント、そしてアクティビティが展開される流動的なフィールドを作ることになる

(Allen, Stan (1999) Points + Lines: Diagrams and projects for the city, New York: Princeton Architectural Press, p.52. (筆者翻訳))

- ・フィールド：都市 粒子：建築やインフラシステム (1995 年春学期スタジオ、モアレ・パターン)
- ・フィールド：建築 粒子：建築を構成するユニット 《《バイルートのスークの再建計画》(1994))
- ・フィールド：建築 粒子：人、プログラム 《《コリアン・アメリカン美術館》(1995)、《国会図書館関西館》(1996)

d. ハニ・ラシッド (Hani Rashid)

- ・サイバースペース上を行き交う膨大な量の情報と人間とのインターフェイスとしての建築のあり方
- ・現実空間における実体として、物質性をもったオブジェクトからの脱却

d-01. デジタル・メディアによる身体性、空間性の変化の追求

今日、我々は問う。データの海、情報ネットワーク、そしてメディアから抽出されてくる建築とはなんだ？

[中略] この電子の氾濫した状況の中から、あたかも言葉のない発言のように浮かび上がってくる建築を想像することは、まだ予測でしかない不確実な建築の存在を想像することであり、それはすなわち次の千年の建築とつながっていくものである。

(『A+U』1994年4月号、新建築社、1994年、p.55。)

- ・デジタルテクノロジーの発達に伴うメディアの変化と建築との関係性に主な関心
- ・《《スティール・クラウド》(1994)》では、高速道路に沿って無数の帯状のスクリーンが取り付けられ、天気や交通状況など、様々な情報を映し出すことが意図
- ・ペーパーレス・スタジオ開始以前からコロンビア大学のスタジオにおいて、インスタレーション作品の制作を通して、同様のテーマを追求

d-02. サイバースペース

- ・サイバースペースにおける建築の可能性の追求
- ・ウィリアム・J・ミッチェル (William J Mitchell) の『シティ・オブ・ビット』からの影響
- ・《《ニューヨーク証券取引所 3D トレーディング・フロア画面》(1997-1999)
- ・現実空間におけるオブジェクト (実体) としての建築あり方に対し、情報と人との関係性を司る存在としての建築のあり方を提示

e. ジェシー・ライザー (Jesse Reiser) + 梅本奈々子

- ・基本単位システムの流動によって生成される建築のあり方
- ・オブジェクトよりも物質の持つ特性が本質であるという考え方

e-01. 物質に潜在する建築の生成力の追求

建築家にとって、例えば天候のシステムの中に見出される非線形ダイナミクスは、すでに建築的に応用可能な秩序を有している。この応用は隠喩や象徴としてではなく、秩序そのものをそのまま建築に適用するということである。

天候の例をさらに広げることできるだろう。同じ山脈における同じ気流でも、霧や雷雨など、多様な局所的な天気を発生させることができる。これは、空気が均質なメディアではなく、むしろ温度や湿度について多様性を持っていて、それによって天気の安定性や不安定性が決定されるからである。

(Reiser, Jesse "Solid State Architecture" Reiser, Jesse, Umemoto, Nanako (1998) Reiser+Umemoto Recent Projects, Academy Editions, p.51. (筆者翻訳))

- ・現実の物質を建築を生成するメディアとして捉え、そこに潜在する建築の生成力を見出し、物質の流動の中から生成される建築のあり方を追求
- ・《《カテナリーの実験》(1998)》：鎖と重力が生み出す力の流れの秩序を、建築を生成するシステムとして捉え、それによって生まれる形態システムを建築に転用
- ・《《West Side Convergence》(1999)》一定の方向性を持って連続するスペースフレームが、プログラムを収容したヴォリュームに接触することによって、局所的な滞留が発生、様々なプログラムとそれに関連する人々の流動をスペースフレーム構造の流動と連動させることを試行

03. オブジェクト批判以後

a. ペーパーレス・スタジオの建築家の言説の波及と展開

- ・ フォールディングの概念の普及、その形態操作の可能性の追求（FOA《横浜大さん橋国際客船ターミナル》、ディラー・スコフィディオ《アイビーム》など）
- ・ パラメトリック・デザインの普及（Grasshopper など）
- ・ 流体の挙動や特定の素材の特性を、パラメータとして設計プロセスに組み込み、直接的に建築形態を生成する試み（AA DRL、シュツットガルト工科大学、東大小淵研）
- ・ ザハ事務所のパトリック・シューマツハ（Patrik Schumacher）の唱える「パラメトリズム（Parametricism）」
- ・ 建築を社会システムの一部として捉え、社会における様々な問題やコミュニティの要望をパラメータとして建築が成立すべきであるという潮流（MoMA「Small Scale, Big Change」展、ブリツカー賞、2016年ヴェネツィア・ビエンナーレ…etc）

b. パラメトリズム（Parametricism）

存在意義を持ち生産的であるためには、我々はネットワークに繋がり、自身の力を他の人ががしていることに合わせて調整する必要がある。すべてのものは、他のすべてのものとコミュニケーションが取られる必要がある。都市環境に関してこれが示唆しているのは、我々はその中での出来事を可能な限り多く目撃、参加することができ、自らの次の行動についての複数の選択肢が常に提示されていることである。視覚のフィールドが豊かで秩序や多様な情報をもった光景を持ち、さらにその可視レイヤーの背後に内在しているものについて示唆していることで、このような都市環境が達成される。これには接続が決定的な要素となる。パラメトリズムはそのような超接続性を可能にする環境をデザインすることを可能にする。

（Schumacher, Patrik (2011) The Autopoiesis of Architecture: A New Framework for Architecture, Wiley, p.707.（筆者翻訳））

- ・ ザハ事務所のパトリック・シューマツハ（Patrik Schumacher）が提唱
- ・ 1990年代にザハとともにコロンビア大でスタジオ指導（「ユビキタス・アーバニズム」）
- ・ ペーパーレス・スタジオの建築家たちの思想や設計手法を一つのスタイルとしてまとめ上げることを図る
- ・ 多様な要素がそれぞれ個別に自律するのではなく、平等なヒエラルキーのない存在としてネットワークの中で等価に接続され、共存しているような社会像
- ・ ネットワークを物質化したものとして、建築・都市が位置付けられる（アレンのフィールドの概念と共通）

c. アレハンドロ・ザエラ・ポロ（Alejandro Zaera-Polo）

c-01. 横浜大さん橋（1990年代）

フォルムによって、柱・壁・床といった独立した構造は回避され、従来の建築において外皮と構造が物質的に分離されていたのを曖昧にすることができるようになる。そして、構造荷重の差異は異なる部材によってではなく、単一の物質の連続体における特異点として現れる。

（Zaera-Polo, Alejandro (2013) "Forget Heisenberg" Anybody, New York: Any corporation, p.208.（筆者翻訳））

さん橋をゲートとしてではなくインターフェースとして捉えることによって、境界を顕在化するのではなく、二つの状態の間に緩やかな移行が生み出された。

（前掲論文、p.207.（筆者翻訳））

- ・ グローバリズムにおける境界のない世界像に対応した建築のあり方の追求
- ・ 建築を構成する要素が一つの連続体として扱われる
- ・ 都市における人の流動を取り込むような建築のあり方

c-02. 境界の重要性の主張（2000年代以降）

数十年間続いたグローバリゼーションの後、境界のない世界や、自由に循環・流動できる空間性をもったユートピアという幻想が、空間的・物質的な実践の目指すところではもはや無くなってしまった段階に移行しようとしている。つまり、我々は、住んでいるこの空間が境界無しに成立しているわけではないという事実を認識しなければならないのだ。

（Zaera-Polo, Alejandro (2010) "Ecotectonics" Zaera-Polo, The Sniper's Log: Architectural Chronicles of Generation X, Actar, p.258.（筆者翻訳））

恐らく建築のエンヴェロープは、建築を構成する要素の中で最も古く原始的なものである。エンヴェロープは、外部と内部、自然と人工の分割を物質化する。プライベートとパブリックや土地の所有権を区別する。また、ファサードとしては、エンヴェロープは、環境的・領域的役割に加え、表象の装置としても機能する。建築のエンヴェロープは境界、辺境であり、接合部である。つまり、政治的な意味合いに満たされているのだ。

（Zaera-Polo, Alejandro (2009) "The Politics of the Envelope" Zaera-Polo, Alejandro (2013) The Sniper's Log: Architectural Chronicles of Generation X, Actar, pp.479-480.（筆者翻訳））

- ・ すべての要素がヒエラルキーなく、そして境界を隔てずに接続する 1990年代のグローバリズムにおける世界像に疑義
- ・ 2001年アメリカ同時多発テロ以降について、異なる要素が境界を隔てて接しているような世界像を提示

- ・ 建築における境界の問題として、エンヴェロープ（外皮）の重要性を主張（「The Politics of the Envelope」）
- ・ 物質性から表象性への関心の移行を予測

04. オブジェクトへの回帰

a. 概要

- ・ ペーパーレス・スタジオ以降の建築の潮流に対する批判（パラメトリズムや社会性偏重を批判。MOS Architects など）
- ・ 哲学者のグレアム・ハーマンのオブジェクト指向存在論からの影響（デイヴィッド・ルイ (David Ruy) の論考「奇妙で不可解なオブジェクトへの回帰」がきっかけ）
- ・ 「接続」の時代から「切断」の時代への変化に対する応答（911 テロ、EU 分裂危機、Brexit...etc）

b. オブジェクト指向存在論（Object Oriented Ontology）

ダイヤモンド、縄、中性子に加え、軍隊、怪物、丸四角、そして実在または架空の国家などもオブジェクトに含まれる。このようなすべてのオブジェクトは、存在論によって説明されなければならないものであり、低俗で無価値なものとして片付けられるべきではないのである。

(Harman, Graham (2011), The Quadruple Object, Zero Books, p.5. (筆者翻訳))

- ・ グレアム・ハーマン (Graham Harman) を中心に発展
- ・ 相関主義（人間と物との関係性の問題のみを扱う思想）を批判
- ・ オブジェクトそのものについて思考することを主張
- ・ オブジェクトの存在を蔑ろにしてきたこれまでの哲学の考え方を大きく二つ（「Undermining」「Overmining」）に分類

b-01. Undermining（下方解体）

- ・ オブジェクトとは表層的なものであり、何らかのより基本的な要素によって構成されているという考え方
- ・ 一見自律的に見えるオブジェクトは、実際のところ、より小さな部分（粒子、原子 ...etc）の寄せ集めである
- ・ 例えば馬を構成する粒子を全て列記したとして、それは馬そのものを記述できない（ハーマンによる批判）

b-02. Overmining（上方解体）

- ・ オブジェクトとは精神内でしか存在せず、さまざまな質とそれら同士の関係性が本質的という考え方（関係性主義）
- ・ リンゴというオブジェクトは「赤い」「甘い」「冷たい」「硬い」「固体である」「味がする」などの個別の質の関係性の表象でしかなく、そのような関係性こそがオブジェクトそのものよりも本質的である
- ・ 世界が全て関係性に還元されるのであれば、世界の様態（関係性の総和）は変化できない（ハーマンによる批判）



b-03. オブジェクト指向存在論におけるオブジェクト

1. 様々なスケールを持つ個別の存在（クォークや電子だけではなくて）は、宇宙においてそれ自身が究極的な存在である。
 2. これらの存在は、これらが持つ関係性や、持ちうるすべての関係性の和によって還元されることはない。オブジェクトは関係性から後退している。
- (Harman, Graham (2010), "Brief SR/OOO Tutorial" Bells and Whistles: More Speculative Realism, Zero Books, p.7. (筆者翻訳))

もしハンマーを見つめてもハンマーに秘められた様々な秘密が感知できないとすれば、われわれがハンマーを使うときも同じことが言える。犬やコウモリ、さらには虫が知覚しているかもしれない、ハンマーが持つ、人間が知覚できる範囲を越えた多様な質を考えてみるとよい。ハンマーの中で周辺での紫外線や電磁場への影響は、人間の理論と同じく人間の実践にとってもアクセスできないものである。つまり、事物には、理論と実践から隠された背景が存在しているのだ。

(Harman, Graham (2013) Bells and Whistles: More Speculative Realism, Zero Books, p.107. (筆者翻訳))

オブジェクトの実在は人間から隠れているだけではなく、他のオブジェクトからも同様に隠れているのである。ハンマーの実在がすべてのアクセスよりもさらに深いところにあるのは、単に人間やその他の賢い動物（イルカや猿、犬やカラスなど）が持つ、特異な心理学的なり神経学的な性質によるからではない。人間や動物がオブジェクトを汲み尽くせないのと同様に、生命のないオブジェクトも、互いにその実在を汲み尽くせないのである。

(同上。(筆者翻訳))

- すべてのオブジェクト (実在的オブジェクト (real object)) は他のオブジェクトとの関係からは引きこもっていて、直接的にはアクセスできない
- ハンマーは人間にとっては釘を打ちつけることができるという質をもったオブジェクトであるが、それ以外にも様々な質を持っており、さらには人間には知ることのできないものさえ秘められている
- オブジェクトはその本質が汲み尽くせないものであり、また関係性の総体に還元できないという点から、まったく予期しない質を秘めている可能性がある

c. デイヴィッド・ルイ (David Ruy) 「(奇妙で不可解な) オブジェクトへの回帰」

今の建築家たちは、建築とは社会や文化的環境の副産物であるという考えに囚われている。そこでは、建築とは科学主義的なシステムとネットワークの一部、もしくは、環境内 (それが現実の環境であれ、コンピュータ内に再現された仮想的なものであれ) のパラメーターが与える一時的な計算結果でしかないと思われている。おもに形態や美に対して関心を持っている建築家でさえも、仮想的な外部環境と建築オブジェクトとの関係性において、オブジェクトの存在意義となる生成のための外的なパラメーターや条件を見出そうとする奇妙な傾向がある。[中略]

今日では、コンテキストというものがどのように定義されているかが、そこから導き出されたものとして建築を考えることは極めて自然なことと思われている。外的な力 (場合によっては計測可能、仮想的なもの、ないしは建築家による全くの空想的なイメージとしてのもの) をコーディネートすることが、現代における建築の実践における関心の中心にあると理解されている。[中略]

グローバルネットワークの詳細に関心が払われるようになるとともに、建築のオブジェクトの重要性の低下によって、建築が持っていた魔力は取り除かれてしまった。

(Ruy, David (2012), "Returning to (Strange) Objects" tarp - Architectural Manual, Pratt Institute, pp.38. (筆者翻訳))

- 2012年に発表された、建築から初めてオブジェクト指向存在論について言及された論考
- ルイは、ハーマンと学部時代に同級生であるとともに、ペーパーレス・スタジオの初期の学生であり、ライザーと梅本の事務所で勤務していた
- オブジェクト指向存在論における「Overmining」「Undermining」批判を援用し、ペーパーレス・スタジオ以降の建築において、オブジェクトを軽視していると批判
- オブジェクトとしての建築のあり方の可能性の模索を提案

d. アメリカにおける新たな潮流

- オブジェクト指向存在論からの影響
- コンピュータショナル・デザインにおける合理性の追求へのアンチテーゼ
- テクノロジー偏重への批判 (MOS Architects によるデジタルの意図的誤用)
- 「Ugly, Ordinary」への回帰 (MOS Architects のヴェンチャー的姿勢)

d-01. 新コラージュ主義

- マーク・フォスター・ゲージ (Mark Foster Gage)、アンドリュー・コバック (Andrew Kovacs)、ヒメネス・ライ (Jimenez Lai) …etc
- ポスト・モダニズムにおけるコラージュ手法の再考
- インターネット上の膨大な量のデータや、3Dモデリング (Zbrush…etc) の活用
- 組み合わせられるそれぞれの要素は、オブジェクトとして、それに本来備わっていた意味や、それと建築の機能との関係性といったものに還元されない、そのものとして扱われている
- このような要素の集積として生まれる建築も、オブジェクトとして、構成要素の列挙に還元されえない質が獲得されることが意図されている
- ポスト・モダニズムのコラージュにおいて、個々の要素を記号に還元されるものとして捉え、言語論的に記号を組み合わせ全体を構成していたのとは異なる

d-02. 新たなアニミズム

- ヤング & アヤタ (Young & Ayata)、LADG、EADO…etc
- 1990年代以降の建築における自然や生物の参照からの批判的発展
- ペーパーレス・スタジオの建築家たちが、自然や生物に秘められたシステム (群集システムや、自己組織化など) の合理性を建築に参照し、モダニズムにおける機械的な合理性を乗り越えを図ったのに対し、自然や生物の持つ不可解さ、それに伴う雰囲気といったものを参照
- オブジェクト指向存在論において提示されるオブジェクトの持つ不可解さへの関心を端緒?

05. まとめ

a. 現代の 1970 年代的状況との共通性

近代建築が疑うべくもない究極的な主題に設定したテクノロジーが、かならずしもその絶対性を維持できなくなったというべきか。主題が消えてしまったのだ。

(磯崎新『建築の解体』美術出版社、1975年、p.403。)

主題が不在になったとみること、中心をひとつの空洞、あるいは空虚と指定することである。そして表層だけが修辭的な手法の操作対象となる。その修辭のなかに建築家の観念を投影することが基本的なデザインになってくる。絶対的な主題が空洞化されたため、表相は、みかけ上では多様化する。開発されてゆく手法も、多岐にわたるだろう。

(前掲書、p.405。)

七〇年代の中期になって、私たちの作業はその中心の空洞にむかい合うことを避けられなくなりつつある。おそらく次の私の仕事も、その点にかかわることになるだろう

(同上)

- ・磯崎新『建築の解体』（1975）における、1960年代から70年代の建築状況の分析
- ・ペーパーレス・スタジオ以降の建築の状況は、明確な批判対象としてのオブジェクトが消失し、手法のみが多様化する事態
- ・パラメトリズムは、オブジェクトが消失し空洞化した状況を引き受け、多様化した手法を十把一絡げにしようとする試み？
- ・建築におけるオブジェクト指向存在論の議論の盛り上がりは、空洞化し忘れ去られていたオブジェクトという批判対象に再び向かい合う必要が出てきたことによって引き起こされた、必然的な流れ？

b. 建築におけるオブジェクト指向存在論の議論についての留意点

一般的に、建築を思想なり理論なりに結びつけることは、建築が応用的な実践であるという、強力であるがうさんくさい伝統的な考え方をもたらす。そしてその考え方において、建築デザインの評価基準は、それが新しい建築的效果を生み出し続けているかどうかではなく、理論や思想を正しく例示しているかどうかというものになる。この結果、建築自身におけるデザイン効果を生成する力は、建築が思想的（ないしは理論的）効果を生成する限定的な能力に従属するものとなってしまふ。

(Kipnis, Jeff (1993) "Towards a New Architecture" Architectural Design, vol.63 no.3/4, p.44. (筆者翻訳))

- ・AD フォールディング特集号におけるジェフ・キプニス (Jeff Kipnis) の警句
- ・襞のような形態を持った建築をデザインして、その正当性や価値をドゥルーズの襞の概念に求めるような例が数多く現れた
- ・思想や理論を、ある建築デザインを正当化するため、または建築を評価するために利用することは、ともすれば（思想的・理論的正しさとは関係なく）建築そのものが持っている可能性を削ぐことになる

参考文献

01. オブジェクト批判の萌芽

- ・ロウ, コーリン, 松永安光 (訳), 伊東豊雄 (訳) 『マネエリスムと近代建築』 彰国社, 1981 年。
- ・ロウ, コーリン, コッター, フレッド, 渡辺真理 (訳) 『コラージュ・シティ』 鹿島出版会, 2009 年。
- ・ロウ, コーリン 「コラージュ・シティ」, 『A+U』 1975 年 04 月号, 新建築社, 1975 年。
- ・ロウ, コーリン, 松永安光 (訳), 大西伸一郎 (訳), 漆原弘 (訳) 『コーリン・ロウは語る 回顧録と著作選』 鹿島出版会, 2001 年。
- ・八束はじめ 『建築の文脈都市の文脈—現代をうごかす新たな潮流』 彰国社, 1979 年。
- ・今村創平 『現代都市理論講義』 オーム社, 2013 年。
- ・秋元馨 『現代建築のコンテクスチュアリズム入門』 彰国社, 2002 年。
- ・Eisenman, Peter (1971) "Notes on Conceptual Architecture Toward a Definition" Casabella, Dec 1971, pp.49-57.
- ・Eisenman, Peter (1971) "From Object to Relationship II: Casa Giuliani Frigerio: Giuseppe Terragni Casa Del Fascio" Perspecta, Vol.13/14, pp.36-65.
- ・Eisenman, Peter (1976) "Post-Functionalism" Oppositions 6, 1976.
- ・Eisenman, Peter (1984) "The End of the Classical: The End of the Beginning, the End of the End" Perspecta, Vol.21, pp.154-173.
- ・Eisenman, Peter, Graves, Michael, Gwathmey, Charles, Hejduk, John, Meier, Richard (1975) Five architects, Oxford University Press.
- ・アイゼンマン, ピーター 「カードボード・アーキテクチュア」, 『A+U』 1973 年 11 月号, pp.185-189.
- ・ガンデルソナス, マリオ 「言語論的建築 M. グレイヴスと P. アイゼンマンの住宅の分析」, 『A+U』 1972 年 9 月号, pp.41-64.
- ・磯崎新 『建築の解体』 美術出版社, 1975 年。
- ・Johnson, Philip, Wigley, Mark (1988) Deconstructivist Architecture, Museum of Modern Art.
- ・Wigley, Mark (1993) The architecture of deconstruction : Derrida's haunt, MIT Press.
- ・ウィグリー, マーク, 入江徹 (訳) 「デコンストラクティヴィスト・アーキテクチャー」 『10+1』 no.32, INAX 出版, 2003 年, pp.129-144.
- ・Eisenman, Peter (1991) Unfolding Frankfurt, Ernst & Sohn.
- ・Eisenman, Peter (1992) "Unfolding Events" Zone, 6, pp.423-427.
- ・Eisenman, Peter (1992) "Folding in Time: The Singularity of Restock" D Volume2, Columbia University, pp.99-111.
- ・Eisenman, Peter (1993) Re: Working Eisenman, Academy Press.
- ・ドゥルーズ, ジル 『褻—ライブニッツとバロック』, 宇野邦一 (訳), 河出書房新社, 1998 年。
- ・トム, ルネ, ジーマン, 宇敷重広, 佐和隆光 『形態と構造: カタストロフの理論』 みすず書房, 1977 年。

02. オブジェクト批判の発展・完遂

- ・Lynn, Greg (1992) "Multiplicitous and Inorganic Bodies " Assemblage No.19, pp.32-49.
- ・Lynn, Greg (1993) "Architecture Curvilinearity: The Folded, the Pliant, and the Supple" Architectural Design, vol.63 no.3/4, pp.8-15.
- ・Lynn, Greg (1998) Animate Form, New York: Princeton Architectural Press.
- ・Lynn, Greg (1999) Folds, Bodies & Blobs Collected Essays, La Lettre volée.
- ・Lynn, Greg (2008) Greg Lynn FORM, Rizzoli.
- ・トムソン, ダーシー, 柳田友道, 遠藤勲, 古沢健彦, 松山久義, 高木隆司 (訳) 『生物のかたち』 東京大学出版会, 1973 年。
- ・Allen, Stan (1994) Colossal Urbanism: the Tokyo experiment, New York: Columbia Books of Architecture.
- ・Allen, Stan (1995) "Dazed and Confused" Assemblage, No. 27 (Aug, 1995), pp.47-54.
- ・Allen, Stan (1997) "From Object to Field" Architectural Design, vol.56 no.5/6, pp.24-31.
- ・Allen, Stan (1999) Points + Lines: Diagrams and projects for the city, New York: Princeton Architectural Press.
- ・アレン, スタン, 坂元伝 (訳) 「分散、組み合わせ、場 序論」, 『A+U』 1998 年 8 月号, 新建築社, pp.3-11.
- ・Judd, Donald (1965) "Specific Objects" Arts Yearbook 8.
- ・Morris, Robert (1993) Continuous project altered daily : the writings of Robert Morris, MIT Press.
- ・Fried, Michael (1998) Art and objecthood : essays and reviews, University of Chicago Press.
- ・ラシッド, ハニ, レヴラット, フレデリック, 櫻井義夫 (訳) 「デジタル・アーキテクチャーへの視線 4. ハニ・ラシッド」, 『SD』 1995 年 06 月号, 鹿島出版会, pp.22-25.

- ・アシンプトート「ニューヨーク証券取引所」『A+U』1999年5月号、新建築社、pp.22-27。
- ・Rashid, Hani, Couture, Lise Anne (2002) FLUX, Phaidon Press.
- ・Canadian Centre for Architecture & Greg Lynn (2015) Asymptote Architecture, NYSE Virtual Trading Floor, Archaeology of the Digital 07, Canadian Centre for Architecture.
- ・Reiser, Jesse, Umemoto, Nanako (1998) Tokyo Bay Experiment, Reiser + Umemoto Studio, New York: Columbia Books of Architecture.
- ・Reiser, Jesse, Umemoto, Nanako (1998) Reiser+Umemoto Recent Projects, Academy Editions.
- ・ライザー+ウメモト、橋本憲一郎（訳）『アトラス 新しい建築の見取り図』彰国社、2008年。
- ・カルポ, マリオ, 美濃部幸郎（訳）『アルファベットそしてアルゴリズム : 表記法による建築—ルネサンスからデジタル革命へ』鹿島出版会、2014年。

03. オブジェクト批判以後

- ・Schumacher, Patrik (2011) The Autopoiesis of Architecture: A New Framework for Architecture, Wiley.
- ・Schumacher, Patrik (2012) The Autopoiesis of Architecture, Volume II: A New Agenda for Architecture, Wiley.
- ・Schumacher, Patrik (2013) "I am trying to imagine a radical free-market urbanism" Log, 28, Any corporation, pp.39-52.
- ・Architectural Design (Parametricism 2.0), vol.86 no.2 2016.
- ・Zaera-Polo, Alejandro (2013) The Sniper's Log: Architectural Chronicles of Generation X, Actar.

04. オブジェクトへの回帰

- ・ハーマン, グレアム, 岡本源太（訳）「代替因果について」『現代思想』(Vol.42-1)、青土社、2014年、pp.96-115。
- ・ハーマン, グレアム, 上妻世海（訳）「Art Without Relations」URL=https://note.mu/skkzm01/n/na8f7ff8e60a3（公開：2016年5月29日、閲覧：2016年7月10日）
- ・ハーマン, グレアム, 上妻世海（訳）「The Road to Objects」URL=https://note.mu/skkzm01/n/nfb88f43475bd（公開：2016年6月5日、閲覧：2016年7月10日）
- ・ハーマン, グレアム, 上妻世海（訳）「第一哲学としての美学：レヴィナスと非人間」URL=https://note.mu/skkzm01/n/nea42da20f603（公開：2016年7月8日、閲覧：2016年7月10日）
- ・星野太「第一哲学としての美学 グレアム・ハーマンの存在論」『現代思想』(Vol.43-1)、青土社、2015年、pp.130-142。
- ・Ruy, David (2012) "Returning to (Strange) Objects" tarp – Architectural Manual, Pratt Institute, pp.38-42.
- ・Payne, Jason (2013) "Variations on the Disco Ball, or, The Ambivalent Object" PROJECT, Issue2, Consolidated Urbanism Inc., pp.20-27.
- ・Gannon, Todd, Harman, Graham, Ruy, David, Wiscombe, Tom (2015) "The Object Turn: A Conversation" Log, 33, Any corporation, pp.73-94.
- ・Foster Gage, Mark (2015) "Killing Simplicity: Object-Oriented Philosophy In Architecture" Log, 33, Any corporation, pp.95-106.
- ・Mckim, Joel (2014) "Radical Infrastructure? A New Realism and Materialism in Philosophy and Architecture" Lahiri, Nadir, Radical Philosophy and Architecture: The Missed Encounter, Bloomsbury Publishing, pp.133-150.
- ・Wiscombe, Tom (2014) "Discreteness, or Towards a Flat Ontology of Architecture" PROJECT, Issue3, Consolidated Urbanism Inc., pp.34-43.
- ・ルイ, デヴィット, 平野利樹（訳）「(奇妙で不可解な) オブジェクトへの回帰」2015年（未公開）
- ・瀧本雅志「新しい哲学と「オブジェクト a」」(10+1 web site) URL=http://10plus1.jp/monthly/2015/02/issue-05.php（公開：2015年2月、閲覧：2015年7月29日）
- ・磯崎新, 日笠直彦「建築のマテリアリズム」『現代思想』(Vol.43-2)、青土社、2015年、pp.104-121。

05. まとめ

- ・磯崎新『建築の解体』美術出版社、1975年。
- ・Kipnis, Jeff (1993) "Towards a New Architecture" Architectural Design, vol.63 no.3/4.